

---

# The green boy

murayo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The green boy

### 【NZコード】

N3565E

### 【作者名】

murayo

### 【あらすじ】

むかしむかし、森の中の小さな村。そこに100人の村人と一人の醜い緑の生き物がいました。魔法の力で村人を幸せにし、仲良く暮らしていく緑の生き物と村人たち。ところがある日一

遙か彼方、東のほうに

おおきなおおきな森があつた。

森の中には小さな村があり、60人の大人と30人の子供、10人のお年寄りと1人の生き物がいた。

100人の人間と1人の生き物。

たつた一人みんなと違う生き物は、緑の体で、大きな手。

身長は子どもたちとおんなじ大きさだった。

大きな口に、大きな耳で、とても醜い姿をしていた。

その村を訪れた人たちは、「醜い化け物！」といつて、緑の生き物に近づこうとしなかった。

でも、村の人たちは緑の化け物をとっても大切にした。

それは、彼が大きな魔法の力を持つていたから。

ある日、村の村長さんがぎっくり腰になつた。

でも緑の生き物が一なですると、村長さんはあつという間に地面が元どおりになり、子どもが助かつた。

大地震が来て、がれきの下に子供が閉じ込められた時、

緑の生き物が地面をトンとたたくと、あつという間に地面が元どおりになり、子どもが助かつた。

また、お腹が大きくなつたお母さんに、女の子が生まれてくるよと

教えてあげた。

すると、本当に女の子が生まれてきた。

縁の生き物の魔法は何でもできた。たつた一つのことをのぞいて。でも、村の人たちは縁の生き物を大切にした。子供達は一緒に遊び、大人たちはご飯を作つてあげ、お年寄りは昔話を聞かせてあげた。

村の人たちと縁の生き物は長~い間、とても幸せに、仲良く暮らしていった。

ある日、縁の生き物と10人の子供が一緒に森の中で遊んでいた。すると草むらから、20人のずんぐりした野党が出てきた。野党は大きな棍棒を振り回し、あつという間に6人の子供たちを殺してしまった。

血まみれで倒れている友達を見て、3人の子供たちは逃げだした。でも、一番小さな男の子1人と緑の生き物は、怖くて動けなくなってしまった。

泣きじやぐる男の子。

すると、さつき逃げた3人の子供たちが、10人の大人を連れてきた。

大人たちはクワや簫で一生懸命戦つた。でも、20人の野党には敵わなかつた。

10人の大人も、3人の子供も殺され、残りは男の子一人と緑の生き物だけ。

15人になつた野党は緑の化け物を捕まえ、ロープでぐるぐるに木に縛り付けてしまつた。

そして、最後に残つた男の子の足にロープを付け、岩みたいなごぶしでガンガン殴りつけた。

男の子は泣きながら逃げ回る。

必死で地面をけつて。ロープを取ろうともがいて。

殴られたせいで折れた腕を引きずつて、必死に逃げる。

でも、野党たちに引きずりまわされ、笑われながら殴られる。

男の子の顔や頭からは血がどんどん出でてくる。

そのうち男の子は意識をなくして、ぐつたりと動かなくなつてしまつた。

緑の生き物は叫んだ。「やめろーやめてくれー！」

目の前が涙でかすんでくる。

声がかかるほど叫んでも、野党たちはやめてくれない。  
ただただ男の子と緑の生き物を見て笑っている。

すると、だんだん緑の生き物の心の中に黒いものが浮かんでくる。

「殺してやる…殺してやる…」

でも、緑の生き物はどうする」ともできない。  
彼の魔法では、人を傷つけることができないのだ。

緑の生き物は地団太を踏んだ。

強く。強く。

足の感覚がなくなるまで。

それでも野党たちはまだ笑っている。

その時、緑の生き物の右足からボキッという音が聞こえた。  
緑の生き物を見てみると、右足が折れて、白い骨が見えた。  
骨は鋭く、血で赤黒く光っていた。

緑の生き物の心はすっかり血と同じ色に染まってしまった。

緑の生き物は足の骨でロープを切った。

そして、2本の腕と左足で男の子を殴っている野党めがけて一気に  
駆けて行つた。

一人目の野党のおなかめがけて一気に右足を突き出した。

右足は野党のおなかを貫き、野党は血を流して倒れた。

続いてほかの2人の野党も同じようにお腹を蹴つて殺した。

残つた野党たちは怒つて、緑の生き物に襲いかかつた。緑の生き物は、さつき殺した2人の野党からナイフを奪つて無我夢中で振り回した。

ナイフは野党たちの腹や目、喉を貫き、やがて野党は全員死んでしまつた。

それは緑の生き物が初めて魔法ではなく、自分の力を使つたときだつた。

血だまりの中で緑の生き物は呆然としていた。

顔は涙と血が混じり、あんなに生き生きしていた眼は何も写していなかつた。

呆然としたまま緑の生き物は男の子のほうへ歩いていった。男の子の眼は閉じていたが、息はしていた。

緑の生き物は右足を引きずり、男の子を抱え、村へ戻つていった。

村へ戻ると、血まみれになつた緑の生き物と男の子を見て、大人たちはびっくりした。

そして、緑の生き物を見ると、「化け物!」と言つて、男の子を連れて家へこもつてしまつた。

村の人たちは、緑の生き物が助けてくれていたことを忘れたよう

に睨みつけ、罵倒した。

緑の生き物は悲しかつた。

悲しかつたけれど、涙が出なかつた。

そして、黒く染まつてしまつた心の中で、村の人たちに對して黒い気持ちが浮かんできた。

「殺してやる…殺してやる…」

緑の生き物は魔法で自分の足を治し、立てかけてあつた鍬を持ち、自分を罵倒した人たちのいる家へ駆けた。

そして、叫びながら逃げる村人たちを次々に殺していった。逃げ遅れた子供たちも、どんどん殺していった。

悲しかつた。

鍬が折れてしまい、自分のこぶしで人を殴つた。

痛かつた。

悲しすぎて、苦しすぎて。

自分がいま何をしているのかわからなくなつた。

そして、最後に村長の家へ辿り着いた。

村長の家の中には、10人の大人と10人の子供、10人のお年寄りがいた。

大人たちは震え、子どもたちは泣いていた。

でも、お年寄りたちはじつと緑の生き物を見つめていた。

1人のお年寄りが緑の生き物へ近づいた。

そして、緑の生き物の手を取り、黙つてなでた。

しわしわの手は、見てくれば醜かつた。  
でも、暖かくて、やさしかつた。

緑の生き物の目に、よつやく涙があふれてきた。  
心の中の黒い気持もすりつと引いていった。

「僕は謝りません。あなたたちは僕の心を傷つけた。  
でも、やつぱりこの村のことは大好きでした。  
だから、元に戻そうと思います。」

皆、緑の生き物を見つめた。

「でも、僕は人を殺してしまった。  
もう前みたいな大きな魔法の力は持つていません。  
だから、みんなの片方の目をください。一つの目玉で一人、生き  
返らせます。  
これが僕の最後の魔法です。」

子供たちも、大人たちも震えて動けませんでした。

緑の生き物は悲しそうに眼を伏せ、村長の家を立ち去るひつとしました。

すると、さつき緑の生き物の手をなでたお年寄りが、そつと彼の手  
を右目に当てました。

緑の生き物はそつと手に力を入れて、静かにお年寄りの田玉を取り出しました。

そして、取り出した田玉を地面に埋め、息をひとつ吹き掛けました。

3つ数えると、地面がぼこぼこと膨れてきました。

やがて地面が割れ、左目がない、一番最初に殺した大人が出てきました。

皆びっくりしましたが、その大人が生き返つたのだとわかると、涙を流して喜びました。

次に女の子の田玉から、2番目に殺した大人が。

おばあさんの田玉からは、3番目に殺した女の子が。

そして、30人の村人たちが生き返りました。

緑の生き物は森へ戻り、20人の野党の両目から残りの40人を生き返らせました。

そして最後に、野党に傷つけられた男の子のけがを治してあげました。

男の子が治つたのを見届けると、緑の生き物は森の奥深くへと去つてゆきました。

一方村では皆大喜びです。

村長さんはちゃんと全員生き返つたか確認するために、数を数え始めました。

「大人…60人！  
子供…30人！  
お年寄りたち…10人！  
あれ、一人足りない…？」

村長さんは何度も何度も数えなおしました。  
でも、やっぱり100人しかいません。  
どうしても一人足りないのです。

その時、1人の男の子が言いました。

「村長さん。人間は100人だけど、たった一人縁の生き物がいな  
いよ」

村人たちはあたりを見渡しますが、縁の生き物の姿はどこにもあり  
ません。

村人たちは村中を探し、森中を探しました。

そして満月が昇り、辺りが暗くなり始めたころ。  
けがを治してもらった男の子が一本の大樹のもとへやってきました。  
その木はほかの木よりも大きく、びっしりとしていました。  
でも、葉のざわめきはとても悲しく響いていました。  
ふと大樹の根本を見ると、横一文字に大きな傷があり、そこから赤  
い汁が流れ出していました。

男の子はその汁をハンカチでぬぐい、つばをつけてあげました。  
やがて男の子に追いついた大人たちが包帯を持ってきて、大樹をぐ

るぐると巻いてあげました。

それから50年後。

片目の村人がほとんどいなくなつたころ。

村人は100人から200人へと増えました。

森の奥深くにある大樹の包帯はいつの間にか取れて、傷痕は消えてしまつっていました。

そして、この春もたくさんの桃色の花を咲かせています。

(後書き)

初めて投降した作品です。  
イメージは小説というより、絵本に近いような  
からりと読んでもらえたら、嬉しいです。  
…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3565e/>

---

The green boy

2010年10月9日14時25分発行